IdeaNote

過労死確定

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩｄｅａＮｏｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ１０４９Ｒ

【作者名】
過労死確定

【あらすじ】
小説のＩｄｅａを纏めているとき、作者は気付いてしまった……。

これ、全部書くの無理じゃね？

このままでは自分が過労死してしまう！

でも、このままこのＩｄｅａを腐らせておくのは勿体ない！

そこで作者は閃いた！

そうだ、誰かに書いてもらおう。

というわけで、作者が考えた二次創作の原案が、ここにはのっています。

プロローグのみを書いておくので、この話の続きを書きたいと思った方は、感想にて連絡を入れてください。

先着順で、執筆の権利はすべてその方に譲渡します。

では、お待ちしています！

ハリー・ポッターと陰陽師の教師

とある私立高校にて、薄汚い白衣をきたおっさんが黒板のまえにたち、素晴らしい早さで板書をおこなっていた。

腰まで伸びた長い髪が特徴のだらしない、このおっさんは日本史の教師のようで、黒板には年号とともにいくつかのもじがかかれている。

「これ、テストにでるからな。覚えておけ。」

教師が振り向くと同時にチャイムが鳴り響き、一気に教室のなかが騒がしくなった。

昼休みの時間なのだ。

教師はめんどくさそうに起立、礼を終わらせると、どの生徒よりもはやく教室を出ていった。

普段はこのまま職員室に帰り飯をたべて仕事をするのだが……

……あいにく、彼には予定があった。

昼飯を食べに行くために購買に向かって流れる生徒達の波を軽やかに避けながら、彼は屋上に向かった。

立入禁止のふだが貼られているのをあっさり無視して、彼は屋上へとつながる階段を上がり、屋上へと姿を表した。

そこには長い髪と髭の全てが真っ白になった半月型の眼鏡をかけた老人が立っていた。

「よぉ。ひさしぶりやなアルバス。」

「あいも変わらず変わらぬな……陰陽師。」

…†…†……†…†…

事前に購買で確保しておいたパック型の容器にはいったジュース（コーヒー牛乳）をストローで吸い取りながら、教師は地のしゃべり方である関西弁で気さくに老人と会話をしていた。

「ふーん。リリイとジェームズのガキがな……もうそんな歳かいな。」

「光陰やのごとしじゃな。とくにこの歳になると時がたつのを早く感じる。」

「せやったら俺は、時間がマッハで通り過ぎんな。矢なんて目やないで。あ、そういうたら用事があってきたんやったな？なんやったっけ。」

「ホグワーツに東洋魔術の授業をいれたいと思っておる。あなたの力が借りたいのじゃ。」

「なんや、ヘッドハンティングにきたんかいな。」

「来ていただけるかな？」

教師は暫く考えた後、ニヤッと嫌な笑みを浮かべて首を縦に振った。

「普通の学校にはあきとったところやで。上等や。千歳になった記念に、ホグワーツの教員、引き受けたろ。」

ホグワーツに伝説の陰陽師が襲来することが、この時確定した。

ダンディズム・マダオ（前書き）

ええ、そうです。銀魂の二次創作です。

ダンディズム・マダオ

今週のジャンプでグラサンが分身していた。

「いや、なんでリングディントン！お前じゃ勝てないよ、長谷川！」

「おまえ、よくこの状況で漫画読んでられんな！カエラとか今はどうでもいいだろうが！」

怒声と共に塹壕に戻ってきた友人をみて、グラサンをかけたおっさんはハードボイルドな笑みを浮かべた。

「よう、戦況はどうよ。」

「まじでやべぇ。あのバカ将軍、明らかに罠ってわかっていたのに功を焦って部隊の半分をつぎこみやがった！今回も負け戦だよ。」

「そうかい。」

グラサンのおっさんはそれだけ言うと、ジャンプを男に渡し刀を掴む。

「んじゃ、撤退だな。俺の出番か？」

「ああ。……すまない。」

「なあに、いいってことよ。」

おっさんは塹壕からゆっくりと出ていき……敵の弾幕に貫かれた。

「よし、仕留めたぞ！」

「いや、待て！あれは……！」

みるみるうちに弾丸に貫かれた傷が治っていく男を見て、敵兵達の顔が恐怖で引きつる。

「《不死者（アンデッド）》《死の医者（デスメディカル）》……三島泰三！」

おっさんはタバコを燻らせながら敵兵に突撃していく。

右手に刀。左手に拳銃。

刀で弾幕を切り崩し、銃弾を的確に相手にたたき込む。そして相手の陣地にのりこんだ三島は容赦なく相手を刻んでいった。

……†……†……†……

「というのがお前の前世なわけじゃが……。」

「いや……しってるよ？覚えてるよ！？なんでわざわざ回想させたんだよ！！」

ここは所謂死後の世界。
真っ白な空間のなかに、白い髭を生やした老人と、泰三が座っていた。

「か――――――ッ！このバカモンが！読者のためにきまっとろうが！！空気読めグラサン！」

「オレをバカにするのはいいがグラサンを馬鹿にするなぁあああああああ！」

神と壮絶な殴りあいが始まりかけたが、それは一人の主婦の登場によって中止された。

「神ちゃん！あんた学校にも行かずになにしてんの！！」

「か、母ちゃん！？」

「母ちゃん？！あと学校！？神様もいくの？！！」

なんか……母親を名乗る髭を生やしたオバサンが登場したのだ。

「うっせえよクソババア！ていうか部屋に勝手にはいんなっつったろうが！」

「あ、あんたが今日の神ちゃんの話し相手？御免なさいね。このこ学校にも行かずにここに引きこもってばっかりだから、話相手に餓えているの。よかったら、暫くここにいて話相手になってあげてくれない。」

「いいっすよ。俺もちょうど死んだところですし。」

「そう？ありがとうね。ほら、神ちゃんからもお礼言いなさい。」

「もういいよ、でてけよババア！もう入って来んなよぉ！」

ちょっと半泣きになりながらお母さんを追い出した神は暫く肩で息をして、ちょっとだけ目元を拭った後、登場したときのような雰囲気を取り繕いながらこちらを振り返った。

「さて、おぬしには憑依転生をしてもらう。」

「学校には行けよ神ちゃん。」

「ちょ、もう、お前……ゆうなやぁあああああああああ！

！」

涙を流しながらマジレスしてくる神をひとしきり笑った後、泰三は明らかにめんどくさそうな態度で尋ねた。

「なんで俺？」

「お前に憑依してもらう予定の男がお前に似ておるからじゃ。」

「だれなんだよ。そいつは。」

「銀魂・長谷川泰三。」

「……！」

「おぬしはコイツに転生してもらう。」

「まじでか……。」

実は彼自身も『見た目が似てるなー』と思いながら読んでいたキャラクターなのだ。

「転生の際にはお前の記憶と魔法の知識を残しておく予定じゃ。」

魔法は治療用の回復魔法だ。彼が不死と呼ばれる理由はここにあり、どんな重傷も一瞬で治し直せない病は存在しないほどである。

「じゃが、おぬしは別人の体になるわけじゃから、自身にかけられていた再生魔法は使えぬぞ。」

「ようするに、俺自身は《不死者》ではなく普通の人間になるわけか……。あれはマッドな科学者にやられたものだし、向こうでの再現は無理だろうな。」

泰三は暫く考えた後、不敵に笑って返事を返した。

「いいぜ。俺があのマダオになって、アイツの人生をかえてやる。」

「まあ、ワシは暇潰しのために呼んだんじゃがな。」

神はそれだけいうと、手を一振りした。

直後！

泰三の足場が突然穴に変化し、泰三を凄まじい速度で落下させる。

「幸運を。」

白い空間には神の言葉だけが残った。

ダンディズム・マダオ（後書き）

主人公がマダオの体に憑依し攘夷戦争に参加。

するお話。

その後はお任せします。

オリジナル主人公設定　ネギま

名前・山梨芳清（やまなしほうせい）・男

原作名・ネギま／能力のみ伝説の勇者の伝説

設定・神とか魔法とかそんなものに一切関係ない普通の一般人。だった少年。

小学４年生のころに神の声も聞いていないのに《殲滅眼（イーノ・ドゥーエ）》に開眼。（ちなみに伝説の勇者の伝説の原作はあるという設定）

人を食べてしまうかもという恐怖負け引きこもりになる。

それから三年間家に引きこもっていたのだが、伝勇伝原作者・鏡貴也に応援のメッセージをもらい復帰。それ以来鏡貴也を神のように信奉している。魔法がこの世界に存在しているということが知らないこともこの復帰の一因となっている。

引きこもりから復帰した彼だったが、一年遅れで編入した学校は麻帆良学園男子中等部。当然のごとく人払いの結界などが彼に効くわけもなく、真夜中コンビニに行った帰りに鬼を目撃。

その鬼からは何とか逃げ切ることに成功したが、魔法先生たちにつかまってしまう。

当然彼はきちんとした訓練を受けることを強要されるが、逃走。できるだけ一般人の友人の近くにいることで魔法先生たちの追撃を回避する。

彼自身の性格としては、人食の衝動がわき上がる可能性があることは極力控えているため、血を見るのが大の苦手。戦闘すること事態大嫌いであり、戦うぐらいなら即座に逃げを選択する。

性格はかなり温和で口調も優しい。殲滅眼さえなければ間違いなく清く正しい一般人に分類される人間である。

殲滅眼性能・原作とほとんど変わらず、空気中からは微弱な魔力を吸収すること、魔法を根こそぎ食らうこと、それによって回復力、身体能力が異常に活性化することが主な能力。

原作と違うのは……というか付属効果として、気による攻撃も完全に吸収し力にすることができるぐらい。

人食衝動の有無は今のところ確認されてはいないが、鏡貴也の考察では《原作でも人食衝動は完全にないため、おそらくはないだろう》と推察されている。ただ、人を食べられるかどうかは不明のまま。

オリジナル主人公設定　未定

名前・未定・男

原作名・未定

設定・幸薄き少年。具体的に言うと、外を歩けば必ず犬の糞を踏み、お金を落とすことなんて日常茶飯事。詐欺にあうこと多数。強盗事件に巻き込まれること１２回。

町の不良には必ず一日一回は絡まれ、酔っ払い親父の介抱をすれば必ずげろを浴びてしまうという、もう不幸が服を着て歩いているんじゃないかと言わんばかりの不幸っぷりを発揮する。

当然学校でも友達はおらず、幼いころに両親も亡くしていたためひどく孤独な生涯を送っているときに
横断歩道を渡っている老人を助けようとしてトラックにはねられ死亡する。

その後、死後の世界に手神に土下座されて謝られる。どうやら彼の不幸っぷりの原因は神が仕事をミスったからしい。

いろいろあきらめていた彼は、謝り倒す神を笑って許したが、それでは気が治まらないということで転生の権利を得た。

しかし、彼としては別にチート性能とかはいらなかった。ただ彼は一つだけ神に願った。

「来世では親友と呼べる人ができればいいな……」と、

神はチート性にならない限りで、友達を作る手段を要求されある一つの能力を彼に与えるのだった。

性格は温和の一言。不幸に見舞われながら恨み言一つ言わずにニコニコ笑うほどの猛者。基本的に自分に降りかかる不幸にはひどく鈍感で気にしないが、他者が不幸になるのをとても嫌がり、全力で助けようとする傾向がある。

口調は執事のように丁寧。卑猥な言葉を聞くと顔を真っ赤にして『そ、そういうことをいってはいけません！！』とおこってくるので、かなり生真面目な性格だと思われる。

天性のツッコミの才能あり。

殺人は基本的に許容しないが、今後どうなるかは未定。

能力・《異世界住人召喚・五人限定》

神が主人公に与えた能力。主人公が知っている小説・漫画の登場人物を五人だけ召喚することができる。召喚前は白紙のカードとなっており、召喚と同時にカードは姿をけす。

召喚した人物は神に作られた存在らしく性格とかはそのままだが、過去や設定を一切忘れている、というか、存在しない。ただし無条件で信頼し友人になってくれるなどという都合のいいことは一切なく、主人公を見限られれば勝手に離れていくほどの自由意志を持っている。

召喚決定人物・《上条当麻》

言わずと知れた《とある魔術の禁書目録》の主人公。主人公は自分と同じ境遇にいるのに決して屈折せず、かっこよく生きる（主人公主観）上条にあこがれているため彼を召喚する。召喚と同時に主人公が望むアイテムが一つ贈与されるのだが、上条の場合は幻想殺（イマジンブレーカー）しがもたらす不幸を軽減する手袋が贈られた。

《忍野忍／キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード》

なんらかの理由で戦闘に巻き込まれてしまった主人公と当麻のピンチを救ってもらうために主人公が呼び出した《化物語》の最強の吸血鬼。

神による改造を受けたらしく、人食はできない体になっている。代わりに普通の食事で栄養が取れるようになっているようだが、やはり好物は血液のため、主人公によく血をもらっている。彼女に与えられたアイテムは阿良々木暦が吸血鬼の能力を封じたときと同じ状態にするブレスレッド。その状態のときは主人公に肩車をしてもらっており上条はよく喧嘩をしている。

性格的には、封印後阿良々木と和解をした後のような感じ。『ぱないの！！』が口癖。

残り三人は未定。

二人の金色の吸血鬼　ネギま×化物語

化物語×ネギま

あらすじ

本来なら死ぬはずではなかったキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。しかし、彼女はとある転生者の出現によって運命が変わってしまい、心渡の所有者が自殺する現場を見てしまい絶望し自殺してしまう。

そんな彼女ではあったが、それを見て怒り狂った神が彼女を神の部屋へと召喚。

「死んだだけでお前の罪が消えると思ってんの？マジウケるわー。絶望したからって好きなタイミングで死ねると思うなよ。お前には贖罪として異世界に行ってもらう。その異世界でお前が元いた世界で殺した人間の数×百人の人間を救うまで死ねないように呪いをかけた。それが終わったらあとは死ぬなりなんなりスキにしろ。ちなみにその過程で人を殺したらその数×百人追加だからそこのところよろしく～」

そうして、『自殺とか殺されたりしたらたまらん』という理由から彼女がもっていた吸血鬼としての弱点をすべて消された上に、妖刀と化した心渡を渡され、『前の名前が偉そうでムカつく』というりゆうで『忍野忍』と名前を改名され、そんなかみからの『補正』をうけた彼女は異世界に送られた。

死にたいシニタイと心の奥底で考えながら、人を救っていくキス

ショット。そんな彼女はとある古城で吸血鬼に変えられてしまった一人の少女を救うことになった。

彼女の名前はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェル。

彼女たちの出会いによって物語は加速する！！

作者による説明

忍による、キティのための、二次創作です。

更新が停止されているので提案してみました。いや、ねぇ・・・・悪いとは思いますけど設定は多少代えさせてもらうので勘弁してください。正直続きが見たいのに更新されないという生殺し状態で参っています。

ガールズラブではありませんので厳重注意を！！（まぁ、実際書いていただけるならお任せしますが）

忍の性格的には阿良々木と和解して吸血鬼としてのキャラがガラガラと崩れているあたり。「ぱないの！！」フツーに言う感じです。

ちまちま人を救っていては埒が明かないということで戦争にも介入します。

基本的設定はこんな感じです。書いていただけるならあとはお任せしますが、できれば魔法世界編（ムンドゥス・マギクス）まで書いてほしいなぁというのが

作者の本音だったりします。

ではでは、小説仕上げなければならないのでこの辺で！！

オリキャラ設定　ＢＬＥＡＣＨ

名前・ロバル・アルカリエ

転生世界・ブリーチ（ＢＬＥＡＣＨ）

設定・いつの間にか虚圏の最上級大虚（ヴァストローデ）に憑依転生してしまった、礼儀正しい元高校生。当然ＢＬＥＡＣＨの原作知識は持っており、最終的に藍染にごみのように捨てられる虚の将来を嫌がり、藍染に対抗するために虚圏で破面とは違う進化を目的とした大組織を設立していく。

能力・未定。しかし、元高校生であるためまともな戦闘はできない。その都合に合わせて藍染と同じく強力な精神操作系が望ましい。

破面とは別ルートの進化・崩玉の影響を受けないうちにロバルが考え出した破面以外の進化法。

解面（カイ）・最終的に強くなるには仮面をどのような形であっても外さなければならない。という考えのもとに考案された進化法。仮面は自分の失った心の一部と仮定し、それとの対話を行い屈服させることで仮面の取り外しが可能となった進化方法。大体《帰刃》前の破面と同じ強さ。斬魄刀を保有するがこれはただのオプションとして霊圧を固めたものなので大した力はない。そのため作らないものもいる。すがたはだいたい人間になるが本来ならあり得ないような髪の色になるためまだまだ人間には程遠いらしい。

仮面剣・死神の《卍解》。破面の《帰刃》と同じ強さを手に入れるためのもの。仮面と自身の霊圧を融合させることによって不気

味な白い特殊能力を持った武器を作ることができる。霊力も格段に上がり虚閃も王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）級まで威力が上がる。

人虚（ヒューマホロウ）・《虚化した死神も、死神に近づいた虚も最終的に近づくべきはすべての始まりである人間である》という考えに肉付けをして完成された虚の最終進化系。最後の月牙天衝の使えば死神の力をすべて失い人に戻る、ということもこの理論を強化する要因となった。強さは大体一護の《最後の月牙天衝》と同等ぐらい。

活動時間は長く持って二時間程度。それが終わると虚の時の罪をすべて洗い流され人の子供として新たに生を受けることになると予想される。

性格・真正のビビり。自身で戦うことをひどく嫌いたいていは精神操作の力を使い煙に巻く方法をとる。その徹底ぶりは『自分がもっている死の形は《臆病》ですから！！』と言わしめるほど……。基本的に丁寧な口調で話すが、《煩悩まみれ》《静かにできない》《かっこつけ》の三大欠点があるオチャラけた性格。基本的に美人な女が大好きで《虚圏》についたと知った途端、ネリエルとハリベルを探し出すほど……（その時は見つからなかったが）。しかし、ハーレム願望は本人曰くないらしく『日本人に生まれたんだったらやっぱり一人の女性を最後まで愛しぬくことこそが素晴らしい愛だと思いませんか？』が自身の恋愛観。

ネリエルとハリベルの探索をあきらめたのち最上級大虚（ヴァストローデ）時代のドルドーニに遭遇。やたら気が合い意気投合したのち、こんないい人（？）が藍染に良いように扱われるのは許せないと思い藍染に対抗するための組織を作り始め、原作知識をフルに使い破面に代わる新たな進化の方向を模索し始めることになる。

解面となりほぼ人間の姿になった後は、たまにドルドーニと一緒

に人間界に降りてナンパに出かける。しかし、たいていふられるためあまり容姿はよろしくないと自覚している。（それでもナンパはやめないが……）

組織の名前は未定だが、ドルドーニは組織のトップ2に。のちに合流することになったネリエル、ハリベルを三位と四位の置き最後に適当な人物を五位に充てることで『四刃一強（しじんいっきょう）』と称する。（もちろん西尾維新である）

オリキャラ設定　ぬらりひょんの孫

名前：百足崎（むかでざきもも）　百

原作：ぬらりひょんの孫

設定：本性は滋賀に居を構える大妖怪《大百足》。そのむかし琵琶湖の竜神を苦しめたといわれるこの妖怪だが、一度人間に退治されてしまいしばらく妖力を失ったため人型になって生活をする。その時に色々と人間の世話になった彼は、その恩義を返すため、人にあだなす妖怪をこっそりと撃退することにした。京に上るぬらりひょんと接触したことがあるが、ちょっとした勘違いから本気の殺し合いに発展してしまい仲は険悪……といわれているが、何故か毎年年賀状を送りあう仲。実は仲がいいのではとうわさされるが本人たちは絶対に認めようとしない……。羽衣狐を協力して撃退した。

普段は自分をご神体として祀ってくれている小さなさびれた神社の神主をしている。人の姿の時は長い黒髪を後ろでまとめた二十歳ごろのいたって普通の神主だが、本性を現すと京都タワーに巻きついてもまだ体が余ってしまうほどの巨大な百足となる。竜神を弱らせて掠め取った神気を使い不老になっている。

能力：硬甲鎧（こうこうがい）……百足退治の伝承にある《矢が通じなかった》から

発生した畏れ。人型の時も本性の時も、肌や甲殻は異常なまでの硬度を誇り、物理攻撃は受け付けない。ただし、伝承では人の唾液によって甲殻が柔らかくなりを貫かれた。そのため濡れるのが大嫌い。

前進全霊（ぜんしんぜんれい）……『百足は決して後退しない』ということから発生した畏れ。一歩歩くごとに畏れの力が上がっていき、人型の時は物理的威力を持った重圧に、本性の時はそのまま体のでかさと甲殻の硬さに変換される。ちなみにわかりやすい例を挙げると、大体二万歩でリクオ世代の羽衣狐と同等の妖力を持つ。

蟲毒（むしどく）……昔竜神を弱体化させて苦しめた毒。大百足の切り札。この毒は致死性のものではないが浴びるとどんな存在も弱体化し、体にため込んだ力を常にあたりに垂れ流すようになる。大百足はその垂れ流された力を喰らい自身を強化することができる。毒が体内にある間は、毒された存在は激痛に見舞われるため、悪行をしていたころは拷問にも使っていた。

部下：一応それなりに広い範囲を縄張りにしているため小さな組織の長をしている。組織形態は《大百足神社管理委員会》。……妖怪としていろいろと間違っている組合だが今のところ不満は出ていない。心霊的お悩み相談などもしているため、神社のお賽銭とその相談の解決料がこの組織の収入（しのぎ）方法である。

鉄鼠・鉄の牙をもつネズミの妖怪。ひどく怒りっぽく頑固な爺さん。数千匹近い鼠を操る。操られたネズミの歯はすべて鉄になるた

め、集団で襲い掛かればかなりの深手を負わせられる。普段はもっぱら情報収集に専念している。

人魚・琵琶湖に隠れ住む美女。大百足より年寄りだが見た目は二十歳前後。大百足の酒飲み友達で人型になって神社を訪ねてはよく二人で月見酒をする。これといった畏れはないが、大百足と同じように神格化されているため賽銭のいくらかを上納金として納める。妖怪というか土地神に近い。

化け蟹：巨大な沢蟹の妖怪。何故か水を嫌い風を操る。普段は高校生程度の少年の姿になり大百足の助手をしている。

大蛇・人と子をなしたことがある未亡人……というカテゴリーに位置している、快活とした老婆。このメンバーの生活の世話を一手に見ており、基本的に一番力を持っている人。大百足すら知りにしかれる。ババアといったら強烈に怒りだし、蛇の本性に戻って丸呑みにしてくるので言葉遣いには細心の注意が必要。

オリキャラ能力　めだかボックス

世界：めだかボックス

能力：三無い主義（オール・スルー）

前は過負荷（マイナス）認定されていたが、安心院が出てきてからは悪平等（ノットイコール）。

ありとあらゆるものがどうでもいい人物に発現する能力。あらゆる事象を素通（スルー）りさせて自分に影響を及ぼさないようにする。いわゆる透過能力。透明になったりはしないが、物理攻撃は基本的に素通り。アブノーマルやマイナスによる特殊干渉も完全に素通りさせることから、ほかの人からは《受動的絶対防御》などと呼ばれている。

しかし、その効果から他人に干渉することがひどく困難な上に使用者自身がやる気が全くないので、基本的に傍観に徹することになるしかない、作者泣かせの呪われた能力。存在感皆無、やる気皆無、できること皆無、ゆえに三無い主義。

考えたはいいけど自分では絶対に使いこなせそうになかったので、ほかの人に書いてもらうかな～と……。

オリキャラ設定　ネギま

名前：未定

世界：ネギま

能力：《皆無》。特殊な才能があるわけでもなく、魔力が高いわけでも気が多いわけでもない普通の中学生男子。ただし、原作では存在感がない３－Ａクラスメイトの誰かの幼馴染。

軍事研に所属しており、米軍海兵級の訓練を自分に課していたりするが、日常生活では一切役に立たないねと幼馴染に言われてへこんでいたりする。

そんな幼馴染が、夜の麻帆良防衛戦に巻き込まれて、鬼に追われる身となったのが彼の物語の始まり。命がけで軍事研から、武器を持ち出し鬼に対抗して長馴染みを助けようと無い知恵を絞って奮闘し、学園長に目をつけられる。

イメージ的には《とある術の禁書目録》の三人の主人公の一人……浜面仕上。というか性格はあれを完全にコピペしてもいいと作者は思っている。

クロスというにはあまりに限定的すぎたためオリキャラ認定。

この装備は呪われています。外すためには最寄りの教会に行くか、ＡＴＭに三億

どういうわけだかおれは、真っ白な空間にやってきていた。

俺……西沢勉はとりあえずわけのわからない状況を少しでも理解するためにぱっと見た感じの景色を言葉にしてみる。

真っ白。ああ、真っ白だった。目が痛くなるくらい真っ白な空間だった。清潔感あふれるといえば聞こえがいいのかもしれないが、正直人間にとっては完全に真っ白な空間というのはよくないってどっかの医学書に書いてあったな。なんか、空虚な感じがしてくるんだと。

まぁ、そんなことはいまはどうでもいい。問題なのは俺がいきなりわけのわからない空間に連れてこられたということ……。

「いったい……ここはどこなんだ？」

「あれ？そこは『知らない天井だ……』じゃ、ないの？いやまぁ天井なんてないんだけどもさ」

俺がそう言って上半身を起こした時だった。へらへらとした軽―い声が聞こえてきた。

「だれだ！？」

「誰だって言われても……『神だ！！』としか答えようがないよ少年」

そういって俺に話しかけてきたのは、なんだか軽い笑みを顔に浮かべた俺と同い年ぐらいの少年。

その少年は、何をどうやっているのか何もないはずのこの空間に胡坐をかいて浮いている。……ういている！？

「か、かみって……あの神？」

「そう。あの神様。正確にいうとギリシャ神界のヘルメスっていう神様だよ。泥棒と伝令の神様」

「なんで自己紹介に泥棒を入れたのかはわからないけど。オーケー。大体理解した。で、その神様が俺にいったい何の用？」

というか、日本人のおれに何でギリシャの神様が声かけてくんだよ。というツッコミを入れてやりたい衝動に駆られたが、今は自重する。現状おれの状況を説明してくれるのはこの……自称・神様しかいないのだからへそを曲げられるわけにはいかない。

「ふむ……君の心は分かっているよ！！」

「勝手に読むな！？読唇術でもできるのかよ！！」

「直違う気がするけど……心を読むなんて神様にとってはデフォルト機能さ！転生がしたいんだろ！？」

「いや、べつに？」

一切そんなこと考えていないんだが？

「またまた！！テンプレ乙とか思っているくせに！！」

異常なほどテンション高い上に人の話聞かないって完全にうざい奴だよな～。友達少なさそう……。

「悪かったね」

「なんで悪口だけ正確に読めるんだ！？」

「でもざんね～ん。君は転生のために呼ばれたのではありません。肩を落とせよやろーども」

「いったい何がしたいんだあんた！？」

心が読めるんだろ！？話を聞きたいって最初からいってんジャン！？

「神は時として……というか基本的に人の話は聞かない」

「含蓄ありそうだけどこの状況で言われるとふつうに腹立つわ！！」

「ナイスツッコミ。元の世界に残って、吉本はいれば芸人になれたと思うよ」

「その世界から切り離された理由の説明を求めてんだよ！！」

何こいつ！？こんな不条理な神様いるだけで害悪だろ！？

「まぁ、からかうのはこの辺にして……」

「おいこら？」

「ははは！神様だからアイアンクローなんてきかないよ！！だからその手を離しなさい。僕が泣いちゃうじゃないか！？」

「きいてんじゃねぇか！！」

まぁ、そんな無駄話がしばらく続き、三十分後。

ようやく神様は落ち着いたのか、忌々しい笑みを浮かべながら（この数十分でこの笑顔がものすごく嫌いになった）、事情を説明してくれた。

いわく。俺は死んだらしい。いわく、日本の神様は死んだおれを即座に新しい命へと転生させようとしたらしい。いわく、基本的にギリシャ神話の神様たちは人間臭い割に神という職業柄娯楽が少ないため、退屈しのぎを欲していたらしい。いわく、でも自分の管轄から魂引き抜くと『最高神ゼウス』あたりがとてつもなくうるさいため、仕方なく日本の神様から俺の魂を買い取り話し相手になってもらうことにしたらしい。

「以上状況説明終了。わかった？」

「どうして俺は死んだんだ？」

「あれ？覚えてない？」

「ああ。まったく……」

「ふ～ん」

「な、なんだよ？俺そんなに言いにくい死に方だったのか！？」

「いや。９９歳で老衰で死亡。最後には家族たちにみとられて幸せな最後を飾ったって日本の神様からは聞いたよ」

「大往生じゃねぇか！？その割にはなんか若々しいな俺の精神！？」

「そりゃ、魂の半分は魂の溶鉱炉にぶち込まれていたからね。半分ほど転生はしているだろうよ」

「じゃぁ俺が名前をはっきりと覚えているのも、二十代までの記憶が鮮明に残っているのもそれが原因！？」

「まぁそう言うことになるだろうね。よかったじゃないか！！万人の憧れである若返りができたんだよ！！」

「死んでなきゃもっと素直に喜べたけどな」

「でさぁ。話は変わるけど……君今この話が二次創作臭いなぁとか思っているでしょ？」

「まぁ思っているけど……その割には神様らしくないよなお前？」

「なんだい？君もほかの奴らとおんなじなの？神様に土下座させて優越感に浸りながら『へへへ！！おれって神よりつえーんだぜ！！そんな俺がチートハーレムー物語を作ることにだれが文句を言えようか！！いや、いえない！！というわけで……ヒャッハー！！神コラ！？おれが望む力を好きなだけよこせや！！はぁ！？むりぃ！？ふざけてんじゃね～ぞ！！てめぇのせいで俺死んだんだぞ！！それ

なりの侘びと覚悟を見せんのが神道ちゃうんかい！？』というかんじの厨二病あふれる、人間のエゴの塊的なせりふを吐きたいのか？」

神様は意外と毒舌でした。というかこの神様、二次創作業界に平然とケンカ売ったぞ！？

「まぁ、これから暇つぶしの話し相手になってもらうわけだし……君が望むなら今すぐにでも土下座しながら『マジッスンマセンした――！！』っていってもいいわけだけど」

「やめてくれ……あんなこと言われた後でそんなことしろっていったらおれ完全にヤクザか厨二病ジャン……」

すくなくともまともな人間の感性ではそんなことできないと思う……。

「つーかお前の土下座ってなんか軽いな……。人間の土下座ほどの重さもない気がするわ」

「神様は基本質量がないからね。軽いのは当たりまえ」

「そういう問題！？」

まぁ、そんな感じに俺は神様の話し相手になった。

……†……†……†……†……

それからの日々は……正直言って悔しいことに楽しかった。何もなかった白の世界に娯楽を求めて森を作ったり、川を作ったり、湖を作ったり……。

ヘルメスのお父さんの話を聞いたり……。

「ハーレムは男のロマンだって腐れおやじはいっているけど、生まれる子供からすればやっぱりそういうのって最低だと思わない？」

「そうなのか？」

「だってペルセウスだって、神界に上がってきたときわけもわからないうちに兄弟に囲まれて泣いていたよ？『父さん……僕あなたのこと尊敬していたのに、なにこれ？』って。うちのおやじは女好きだからね……。『超神合体・ペルセウスン！！』ができるぐらいに子供作っているから」

「どこのスーパー戦隊だ！？あとそれってもしかしてゼウス……」

まぁ、そんな会話の途中に突如空から巨大な指が下りてきてヘルメスに制裁を加えて行ったが……。あれ、絶対ゼウスの指だって……。

二次創作について話し合ったり……。

「だからさぁ！！あそこほど神様ないがしろにしているところないと思うわけよ！！だって、神様土下座だよ！？足がない神様だっているのにどうやって土下座しろっていうのさ！！」

「そういう問題じゃ……。あと最近はそう言って話は減ってきてるって話じゃないか。それに神様を屈服させるというシーンによって主人公の特異性＋最強性があらわせるんだからやっぱりあれくらいはしないと……」

「でもさぁ……」

ちなみにあとで聞いてみると、この議論は人間界で言うところに二百年に相当するほど長く行われていたらしい。

まぁそんなこんなで、おまえずいぶんと長いこと神界いるからそろそろ神になんね？そっちの方が毎年の神様人口表提出するときかなり楽なんだけど？なんてゼウスさんに言われ始め、ヘルメスにも……

「なっちゃえよ。泥棒の神様の座席上げるから」

というかヘルメスの場合は完全に厄介払いだ……。いらねぇよそんな不名誉な神様の座席。

そんな感じに俺が神界になじみ始めたときだった……。

俺はひとりの人間に恋をしてしまった。

「うわ……」

その子は可憐でかわいく……そして不幸だった。

これほどつらい目にあっている人間がいていいのかと彼女を見たときおれは思った。そんな彼女を助けたいと思ううちに俺は、彼女から目が離せなくなり……そして恋をしてしまった。

何とかして彼女を助けたい。ヘルメスにそう相談してみたが、奴の返事は連れなかった。

「いや。管轄外。あっちのことはあっちの神様がちゃんとやる決まりになっているんだよ。僕たちがしゃしゃり出て行ったら神界同士の戦争になっちゃうじゃないか」

「でも！？」

「勉……わかってくれ。神様だって……できることとできないことがあるんだ」

それはいつもに増して真剣な言葉で、その言葉が事実だと分かって、俺は黙ることしかできなかった。友人だって好きで人間を見捨てているわけじゃない。こいつは意外といい奴だということは長年付き合ってきた俺が知っている。ただ、ギリシャ神話はもはや過去の遺物だ。今の世界は三大宗教たる『仏教』『キリスト教』『イスラム教』がすべてしまっており、ギリシャ神話を信仰している人間は年々減少してきている。そのため神たちの力も減少し、いまや彼らが救える人間なんて指の数程度でしかなかった。

現状最もギリシャ神話が盛んなのは日本だが、あれは信仰ではな

く『利用』だろう。話のネタに使うだけだ。

だから、ギリシャの神々は力を持たない。何かに干渉しないのではなくできないのだ。ヘルメスはそれを説明するときに『歴史だけの老害さ。いまや僕たちはだれからも求められていない忘れられた神なんだ』と自嘲気味に笑っていた。

つまり、神ではあの子を救えない。神ならあの子を救えない。友人を頼ることはもうできない……。

それでも……。

「俺は彼女を助けたいんだ……」

俺は最後にそう言い残すと、悲しそうな眼をしておれを見送るヘルメスに別れを告げ、人間界へと飛び降りた。おれが生きた世界とは……違う世界に。

…†…†……†…†…

そして、俺は目を覚ます。そこはうっそうと茂る森だった。

「いててて……いったいここはどこなんだ？」

あの子と離れた場所じゃなかったらいいな。そんなことを考えながらおれは自分の体を確認していく。容姿は生来の日本人のまま。ランクで言うなら『中の下』か『下の上』。つまりは限りなくふつう。

戦闘能力なんてものは皆無だ。生前はふつうの学生だったようだし、神界では数千年近い年月を体を動かすことではなく、ダラダラとだらけながらのヘルメスとの会話にあててしまった。もし生前何らかの特殊能力を持っていたとしても、風化しているか錆びついてしまっているだろう。

頼れるのは口先三寸。ヘルメスと鍛えたよく回る口ぐらいか……。

「いいよ。それでも……必ず助けてみせるから」

『いやいや……むりでしょ？何身の程知らずなこと言ってんのさ』

そういって決意を固めたとき、俺は信じられない声を聴いた。

そう、神界にいた悪友。ヘルメスの声だった。

「ヘルメス！？どこにいる！！」

『ここだよ。ここ』

俺はヘルメスの声が聞こえるところに目を向けると、そこには！！

「へ？」

羽の付いた兜が乗っかっていた。というかよくよく体を見回してみれば覚えのない奇妙な武装がいつの間にか俺に装備されていた。

兜と同じように羽の生えたサンダル。こしには針のように細い半月上の刃を持った刀。わかりにくかったら、丸い円を描いて、線の部分の三分の一を消してみると大体似たような形になる刃だ。

刀……というか刃が円形になった鎌といった方がいいのかもしれない。ショーテルという昔の武器らしい。

『君だけ送るのは不安だったからね。友人のよしみで僕の武装……つまりは神具を貸し与えてあげるよ。兜の名前はペタソス。僕の象徴的武装だよ。姿を消すことができる。サンダルの名前はタラリア。空を飛び神速の速さで走ることができるよ。その鎌の名前はハルペー。メデューサの首を落とした首切り鎌だよ。切りつけるだけで首が落ちる一撃必殺特典が付いた武装だよ』

「さ、最後の武装以外は感謝する……」

ぶ、物騒すぎる。この鎌だけは絶対に使わないようにしよう……。心に固く誓いながら、俺はヘルメスに笑いかけた。

「その……なんつうか……ありがとな。ヘルメス」

『何を言っているんだい。友達じゃないか？だったら君の恋愛を応援するのは当然のことさ』

「そうか？……そうだな」

まったく。神様のくせにつくづく人間臭い奴だ。そういうところも気に入っているけど……。

『あと、話し相手がいなくて僕もさびしかったからね。これからは武器に移植した意識体を使って常に君に話しかけることにするよ』

「え？」

『戦闘中だろうが、彼女とようやく結ばれて迎えた初夜だろうが話しかけてあげるからね？やった！！これで一人でもさびしくないね！！』

「ふざけんな！！それはただの嫌がらせというんだ！！」

な、なんてこった！？おれの感謝の気持ちを返せ！！

「くそ！！こんな防具外してやる！！大体なんだこの羽の付いたサンダルと兜は！！ダサいんだよ！！」

『なんだよ～。僕がせっかく好意で貸してやったのに～』

「明らかにただの嫌がらせだろ！？いうこと聞かずに人間界に降りたおれへの制裁だろ！？」

しかし、俺がいくら力を込めようともその装備が外れることはなかった。瞬間接着剤どころか、工場で溶接されたみたいだ！！

『ピピっ！！　この装備は呪われています。外すためには最寄りの教会に行くか、ＡＴＭに三億円を振り込みなさい』

「ザオリク！！」

あまりにむかっ腹が立ったので手にもったハルペーを地面にぶつけてがりがりと削ってやるが……。

『ははは！！むだむだ！！武装に宿っているのは僕の意識体であって僕ではないからね。そんなことされても痛くもかゆくもないよ。あとその武装は神界製だからね。そっちの世界で何しようが壊れることは絶対にないよ？』

「ざけんあぁあああああああああ！？」

こうして、俺のにぎやかな、片思いの少女を救う旅が始まるのだった。

この装備は呪われています。外すためには最寄りの教会に行くか、ＡＴＭに三億

というわけで……書いてみました神具使い！！

行く世界は未定です。ので、ヒロインの少女はぼかしてみました。彼女のところに当てはめるキャラはあなたの自由！！さぁ、書いてみたくないですか？

ないですか。はい、すいません。

キャラ設定　ネギま

キャラ名》敦賀迷彩

スキル》千刀流（言わずと知れた刀語のスキル。戦場には無刀でいどみ、敵の武器を盗んで自分の武器として使う）＋盗んだアーティファクトの一時使用権（カードやアデアットされた道具を盗み、一回だけ自分の武器のように使うことができる）＋盗んだ武器を格納する倉庫（ただし保存はできない。つまり、長いこと放置すると必ず不備や調子が悪いところが出てきて使えなくなる）

来歴》神によって転生させられた転成者。くじ引きによってスキルを決められたが、あまりにマイナーすぎるスキルのため即座に原作介入をあきらめた。だが、転生した先が帝国と連合の激戦区の中央に位置する、避難民が取り残された小さな村という不幸に見舞われてしまう。

村人を助けるため、何よりも自分の命を助けるために千刀流を駆使して戦場にいた兵士たちから武器を奪い、戦闘継続を不可能にしてその戦場を一持休戦に持ち込み村人たちを避難させた。

そこから尾ひれ背びれがつき、戦場を丸く収めて集結させてしまう『戦盗流』なる流派の使い手がいるとまことしやかにささやかれるようになってしまい、完全なる世界（コズモエンテレケイア）に目をつけられ暗殺者に常に付け狙われるようになってしまった。

性格・見た目》見た目はまんま敦賀迷彩だが一応男。暗殺者を煙に巻き逃げ回ることで、原作のキャラに近づいていく？

灼眼のシャナ　改造クロスキャラクター

名前：ギルガメッシュ（ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ参照）
フレイムヘイズ・王威の示し手（例外としてもう一つ《宝具の統べ手》という名前もあり）

設定：古代メソポタミアを滅ぼしたのが実は紅世の徒で、その復讐のためにフレイムヘイズとなるという設定。
　半神半人の存在といわれるが、実は徒と人間の子供。バビロニア時代は昔はフレイムヘイズもいなかったため好き勝手で来たという設定（無理あるかな？）。

性格はまんまｆａｔｅシリーズのギルガメッシュ。自在法もまんま王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）。天地乖離（エヌマエリシュ）す開闢の星はめったに使わない。

復讐を終えた後はと徒以上に自由気ままに世界を放浪する。

契約した紅世の王の名は《天の財宝》。性格はｆｅｔａシリーズの誰かを推奨。正直に言うと決まっていないのでお任せ。

色々と無理のある設定だとは分かっていますが、思いついてしまったのだから仕方がない！！　面白いと思うので誰か書いてください＞ｍ（__）ｍ＜

オリジナル主人公　世界未定

そこは真っ白な世界。
何もない誰もいない、ただただ目を焼くような白がある、そんな世界にいたときの俺はえらく愉快な奴だったらしい。

右手にはアク〇リアス。左手には日本酒。
目の前にいるダンブルドアなみに白い髭を蓄えたクソジジイはそんな自殺志願バリに危険な焼酎割りをしている俺を見ながら、苦笑しつつ焼酎を飲んでいた。

『にしてもヌシは欲がないの……せっかく転生させてやるうえに三つ願いを叶えてやるといったのに、一つ目は高級焼酎の用意。二つ目はワシと酒盛りがしたいとは……バカじゃないのか？』

「んだよ。神様と酒が飲めるなんて最高の経験じゃねーか。転生先で自慢できるっつーの。」

『それに最後の願いだが……固有スキル《ギャグ補正》ＥＸって……。大丈夫なのか？主にお前の頭が……』

「神様って意外に辛辣なんだな……。」

『こんなことを言うておるのはおぬしにだけじゃ。まったく、もっとかっこいい能力を選ばんか！ワシの格が下がるじゃろうが！！』

「最終的に自分のことしか考えてないだろそれ……。まあ、神様はそういうけどもさ、実際結構チートだと思うぜ俺が貰った能力」

『まぁ……そうじゃがな。不老不死ぐらい願わんかバカモノが！』

老人はそういったあと、最後の酒を飲み干し、ヨッコイショと立ち上がる。

『では、ヌシを転生する世界へ送り込む。どんな世界に出るかはまったくわからんが、まあ、頑張れ。』

「それこそ愚問だぜ神様。」

俺はそう言いながら不敵に笑った。

「俺はどんな世界でも笑って（・・・）頑張れるようにこの力を貰ったんだ。頑張ることなんて当然だろ？」

俺がそういうと同時に地面に巨大な穴が開き、俺を飲み込んだ。

『まったく。次死んだらまたここにこい、若造。貴様の失敗談を大爆笑しながら聞いてやろう。』

老人の苦笑が、この世界で俺が最後に見た景色だった。

オリジナル主人公　世界未定（後書き）

というわけで、ギャグ補正主人公を投下してみました！！
『シリアス？　バカめ！！　奴は死んだわ！！』
『おふざけはここからや！』
『シリアス？　何それおいしいの？』
をすでいくキャラです！！
あれ？　意外と多い？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1049r/

IdeaNote

2011年11月29日00時55分発行